

花のような建築

-咲いた後の、枯れて咲きゆく美術館-

正会員 小林奈七子
日本女子大学院宮子研究室

1. 研究の背景と目的

現在では「2020年、東京オリンピックまでに建て替える」という常套句とともにスクラップ&ビルドを繰り返している都市建築の有り様。それらはある時代、ある一点のみを目指されたがために、時代が変わり愛着を持たれなくなってしまったものや、完成という絶対的な瞬間があるためにそれ以降は死に向かっていった建築物の結末ではないだろうか。

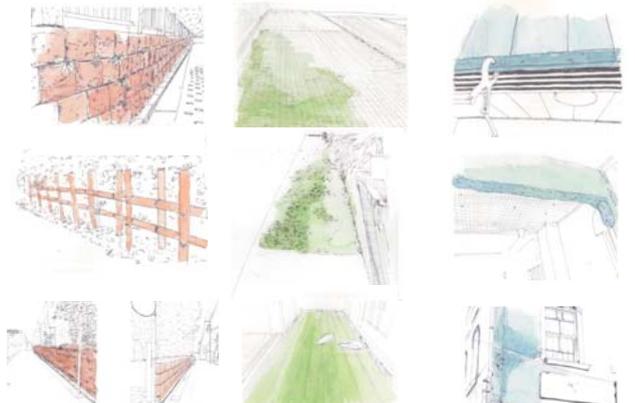
建築さえも枯れていくこと、弱さを肯定することで、もっと手をかけられそして使われ続ける、継続的に愛される建築をつくりたい。咲くことと枯れることが混在して同一線上にあるような、建築のつくりかた・在り方を提案する。

2. リサーチ マテリアルスケール・魅力的な朽ち方採集

建築が枯れていくこと、つまりエイジングを肯定するためには、建築を建築スケールから解放し、マテリアルスケールのモノの集合として認識することが重要なポイントであると考え。建築という大きな枠組みの中では感じにくい弱さも、マテリアルスケールであれば気づくことができる。

身近な場所に見つける魅力的だと思う建築の朽ち方をマテリアルスケールで採集する。採集した朽ち方のコレクションを、朽ち方・場所の詳細な記述化、空間や行為へのスケッチ化という手法で分析・分類化する。

名称 どこで 朽ち方	金属板 屋外、壁 錆びる	コンクリート 屋外、外壁 ひび割れる	コンクリート 歩行空間、欄 表面がはがれる	石 歩行空間、欄 間から草が生える	トタン 屋外、外壁 亀裂が入る
石 歩行空間、欄 苔が生える	歩行空間、地面 変色する	鉄板 屋外、外壁 錆びる	木材 屋外、外壁 塗装が剥げる	トタン 屋外、外壁 錆びる	煉瓦 屋外、外壁 ひび割れる
漆喰 室内、壁 欠ける	木材 屋外、欄 変色する	フローリング 室内、床 焼ける	音 室内、床 井音がけぼ立つ	コンクリート 屋外、外壁	木板 屋外、外壁 錆びる
木材 屋外、外壁	煉瓦 歩行空間、床	石 歩行空間、欄 間から草が生える	レンガブロック 屋外、外壁 表面が浮き上がる	木材 屋外、外壁 塗装が剥げる	木材 屋外、外壁 剥がれ落ちる



環境によってスピードや朽ち方に根本的な相違が見られた。屋外に発見するものは、雨ざらしの環境化における劣化や風化、また植物の成長に伴う変化などによるものであったのに対し、屋内で発見するものは、人間に使われることで経年変化していくものが多い。

Between Scrap and Build

-MIYASHITA Art Center-

Nanako Kobayashi
Japan Women's University Miya Akiko Laboratory

3. 敷地

渋谷区渋谷1丁目26番 宮下公園



渋谷駅周辺には数多くの再開発プロジェクトが現在進行中である。

敷地として選定した宮下公園は平成23年に渋谷区とナイキジャパンのネーミングライツ契約により、アトリエ・ワンによる設計のもと新たにスポーツ施設などを充実させ、リニューアルオープンした。公園は私有地化され夜間は閉鎖されるようになった。それに伴い宮下公園にて生活していた路上生活者を強制退去させたこともあり、現在でも1階の駐車場と渋谷川遊歩道の間にブルーシートハウスが並んでいる。

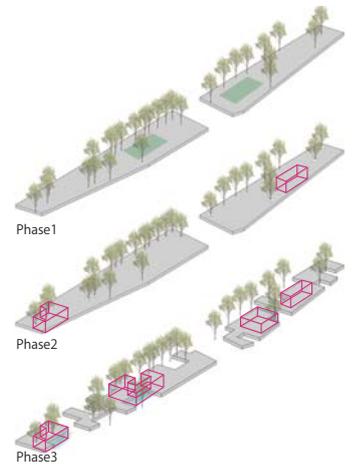
そして2016年度渋谷区は、宮下公園自体の耐震性への懸念や、経年変化による根の隆起による凹凸と躯体への浸食といった諸問題から、2020年に向けた再開発事業の一貫として1階の駐車場も含めた建て替えを決定した。まさに合理性や強さを追い求め、悲しい終わりを迎えようとしている建築のひとつである。

4. 設計提案

4-1. 全体計画

竣工の瞬間、つまり絶対的な一点としての強さがなければ、その建築はもっと優しい朽ち方をするのではないだろうか。竣工の瞬間をなくすために、全体計画として分棟の展示空間を何年かおきに段階的に建てていき、また段階的に改修、再建していく。それと同時に、明らかに朽ちていく宮下公園躯体部分を、段階的に壊していく計画とする。

築年数の異なる建物が混在し更新され続けること、終わりに向かう構造物を徐々に壊していくことで、つくることと壊れていくこと、咲くことと枯れていくことの同時性を目の当たりにする。時代を追うごとに展示空間は増えていき、だんだんと全体がつながっていく。

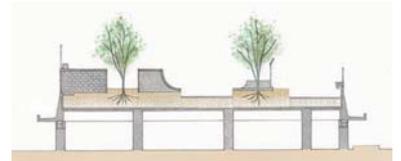
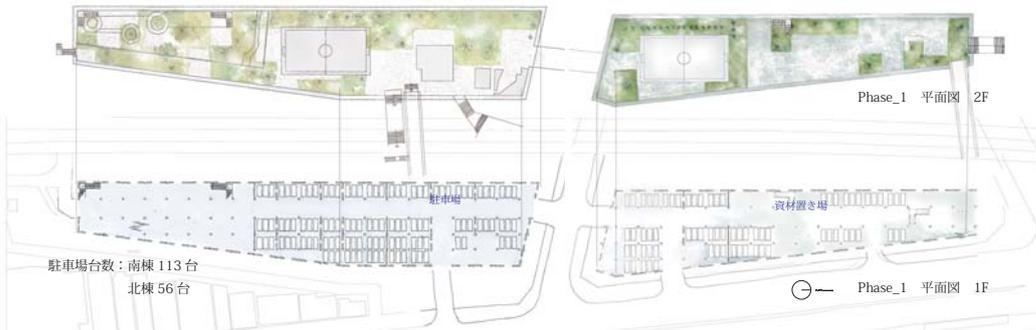


4-2. プログラム

つくる空間のみならず壊れていく建築自体も見せる対象とすることも考え、展示空間、および美術館というプログラムを設定した。徐々に壊れていく宮下公園の躯体に対して、徐々に展示空間をつくっていく(挿入していく)ため、公園躯体に合わせ展示空間も可変的であることが好ましい。よってこの美術館では常設展示やコレクションはなく、企画展を主とする展示空間を複数用意する。また、使われなくなったかつて駐車場であった空間は、資材置き場や工房として活用される。躯体はだんだんと壊れていき、展示空間や工房は徐々につくられていく。工房は「つくる」場所である。そこでは誰もが作り手となれる、流動的で、今日的な、子どもや大人、若者も老人も、そして路上生活者にとってもフラットな、多くの人に開けたアートセンターを目指す。

Phase1_2017 【柱梁のグリッドにおいて、木の幹のないマスの土を降ろす】

新しく舗装された2階の地面には、これからの時間を刻む新たなマテリアルが挿入された。
躯体の荷重を軽くするために減らされた土の部分は、新たなマテリアルをまとい舗装される。
春になると、里桜の木の下には小さなお花見空間が生まれるようになった。



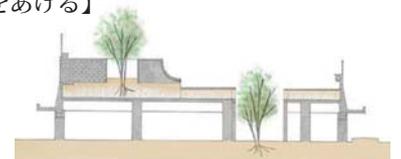
土のなくなった2階地面は舗装され、新たな表情をつくり出す。



2階 新たな散歩道

Phase2_2034 【梁と被っていない位置にある木を地上階に降ろすため、木種に合わせた穴をあける】

梁のかからない位置に植わっていた木々は、徐々に地上へと根を下ろす。
それぞれの木の種類や大きさや成長に合わせた穴が、駐車場だった空間へと伸び、おおきな空洞からやわらかなぼれ日が流れ込む。
開放的な空間には空間を自由に大きく使う展示空間が広がる。



木々のために壊れていく(穴の空いていく)躯体をみることで、段階的に壊れていく必然性を感じる。



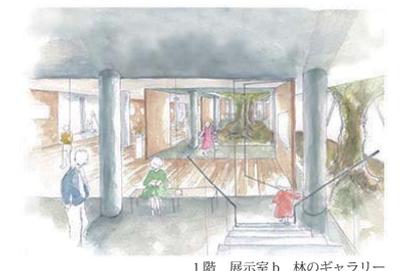
1階 展示室 a ひかりのギャラリー

Phase3_2051 【柱や梁の位置と関係なく、2階にある木々をすべて地上に降ろすためグリッド単位で躯体を壊す】

コンクリートの柱と、地上に降りてきた木々が立ち並ぶ林のようなギャラリー。
新旧の素材が入り交じり、様々な時間の積層を並立に感じさせる展示空間である。
大きくあいた開口からは優しい光が入り込む。



木や土の重みのない躯体のみが廢墟的に残り、人々は壊れ行く宮下公園と新しく生まれた展示空間を行き来するようになる。



1階 展示室 b 林のギャラリー

